



〈第二十五回〉

若い人たちに語り継ぎたい、
次の世代に残しておきたい。
貴重な話をお届けします―

あすへひとこと

「邑楽町の昔ばなし」より

汽車より速い人力車



今から八十有余年も前のお話です。鶉に、とても足の速い寺田勝蔵さんという人力車夫がいました。近所の人は勝ちゃんと呼んでいました。勝ちゃんは、ときどき若い頃の自慢話をしていました。勝ちゃんが太田駅で客待ちをしていたときのことです。

上りの最終電車を見送ったので、家へ帰ろうとしていますと、そのとき一人の紳士が息せきして駆けつけました。電車に乗り遅れたようです。

勝ちゃんを見たその紳士は、「あの汽車に乗りなければ明日の会議に出られない。どうしても重要な会議なので、東京まで帰らなければならない。頼むから館林まで汽車に間に合うように人力車を走らせてくれないか」と頼みました。

勝ちゃんは、「ようがんすとも、引き受けなした」と言うのと、急いでその紳士を乗せて一目散に走り出しました。紳士は車の上から、「あの汽車に間に合えば、車代は十分出すよ」と勢いをつけました。勝ちゃんはお金が欲しいのと、脚の自慢に対しても負けられないと思ひ、舵棒をしっかりと握って力の限り走り続けました。

勝ちゃんは走りながら、汽車は足利駅、福居駅、中野駅(現在の多々良駅)

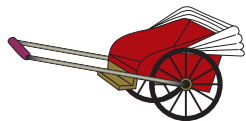
に止まるが自分は近道をまっしぐらに走れば何とかなる、と頭の中で計算しながら走りまわりました。

勝ちゃんが館林駅に着きました。すると、そこに汽車が入ってきました。間に合ったのです。こうしてお客様は無事に汽車に乗ることができました。勝ちゃんも紳士もほっとしました。なんでも、その時、お客は勝ちゃんが十日働いた分ぐらいの車代をくれたそうです。

勝ちゃんはこれが自慢で、折りに触れて、「おれは汽車より速い人力車夫だ」と誇らしげに若い者たちに話してくれました。勝ちゃんは、今ならきつとマラソンの郡選手になっていたことでしょう。

ちなみに、東武鉄道は明治四十年(一九〇七)の八月に、初めて川俣から足利まで通じました。足利から太田まで通じたのは、それから一年半も過ぎた四十二年の二月だったそうです。

人力車は、明治から大正・昭和初期にかけて、人々の交通手段として活躍しました。



【発行】邑楽町老人クラブ連合会 【編集】あすへひとこと編集委員会
平成10年12月31日発行「高齢者の語り(第六集) あすへひとこと」より



風吹きすさび
麦穂ゆめく
(藤川地内)



Photo 根岸定男(記録ボランティア)

ひとりごと From editors

▶ 4月から広報広聴係に配属されることになりました。入職したばかりで右も左も分からず不安でいっぱいですが、早く仕事に慣れて、1日も早くカメラの使い方や広報誌の編集ができるように頑張りたいと思います。▶ 5月も終わり、広報おうらの編集を担当して2カ月があっという間に過ぎました。町の行事などで取材をさせていただき、町民の皆さんと接する機会がとて増えました。これからも取材先でお会いすることが多くなると思います。まだまだ至らない点が多く、ご迷惑をおかけすることもあると思いますが、日々努力をして、誰もが読むのを楽しみにしてくれるような広報おうらを目指して頑張っていきたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。(野木村)



この広報誌は、自然保護のため
植物油インキを使用しています。